

保育所保育で用いられる「感覚」という語句の多義性について

On the Ambiguity of the Meaning of the Word "Sense" in Nursery Schools

古 屋 義 博
FURUYA Yoshihiro

保育所保育で用いられる「感覚」という語句の多義性について

On the Ambiguity of the Meaning of the Word "Sense" in Nursery Schools

古 屋 義 博
FURUYA Yoshihiro

キーワード：保育所保育，保育所保育指針解説，感覚，多義性，発達観

要旨：保育所保育の基準である，2018年改定『保育所保育指針』の同解説（厚生労働省，2018）で用いられている「感覚」という語句の多義性に注目した。同解説の全センテンス中の64件で「感覚」という語句が使用されていた。文脈上，「生物学的学習プログラム（子どもを生物学的な存在「ヒト」と捉える立場）」という発達観に分類されたのが，のべ48件（75.0％）で，同じく「社会的学習プログラム（子どもを社会的な存在「人」と捉える立場）」が，のべ36件（56.3％）であった。2018年改定の要点の一つが，3歳児未満の保育に関する記述の拡充であった。しかし，発達の初期段階で重要とされる生物学的学習プログラムという発達観に基づく記述が十分ではなかった。それらの結果を踏まえて，子どもの発達を多角的に理解した上での保育所保育が望まれると指摘した。

I. はじめに

1. 保育所保育指針の改定を支えている発達観

保育所保育の基準である『保育所保育指針（平成29年厚生労働省告示第117号）』が公示され，2018（平成30）年4月1日に適用された。『保育所保育指針』は1965（昭和40）年につくられ，その後，1990（平成2）年，1999（平成11）年，2008（平成20）年に改定がなされた。

2018（平成30）年適用の『保育所保育指針』改定の方角性を，厚生労働省（2018）は次のように記している。

今回の改定は，前述の社会保障審議会児童部会保育専門委員会による議論を踏まえ，以下に示す5点を基本的な方角性として行った。

（1）乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実

乳児から2歳児までは，心身の発達の基盤が形成される上で極めて重要な時期である。また，この時期の子どもが，生活や遊びの様々な場面で主体的に周囲の人やものに興味をもち，直接関わっていかうとする姿は，「学びの芽生え」といえるものであり，生涯の学びの出発点にも結び付くものである。

こうしたことを踏まえ，3歳未満児の保育の意義をより明確化し，その内容について一層の充実を図った。

特に乳児期は，発達の諸側面が未分化であるため，「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」の三つの視点から保育内容を整理して示し，実際の保育現場で取り組みやすいものとなるようにした。

（2）保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけ

保育所保育においては，子どもが現在を最も良く生き，望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために，環境を通して養護及び教育を一体的に行っている。幼保連携型認定こども園や幼稚園と共に，幼児教育の一翼を担う施設として，教育に関わる側面のねらい及び内容に関して，幼保連携型認定こども園教育・保育要領及び幼稚園教育要領との更なる整合性を図った。

また、幼児教育において育みたい子どもたちの資質・能力として、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を示した。そして、これらの資質・能力が、第2章に示す健康・人間関係・環境・言葉・表現の各領域におけるねらい及び内容に基づいて展開される保育活動全体を通じて育まれていった時、幼児期の終わり頃には具体的にどのような姿として現れるかを、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化した。…略…

(3)～(5)…略…

(厚生労働省[2018]4-7, 下線は筆者による。)

保育所も「幼児教育の一翼を担う施設として、…略…幼稚園教育要領との更なる整合性を図った。」とのことで、「幼児教育において育みたい子どもたちの資質・能力として、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を示した」という。このように、小学校教育との連続性、または小学校段階での学びの基礎をつくるということが強調された。

また、乳児期については、「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちを通じ合う」「身近なものと関わり感性が育つ」ことの重要性が示されている。「健やかに伸び伸びと育つ」は発達観としては網羅的な意味合いで、さまざまな意味づけが可能であろう。「身近な人と気持ちを通じ合う」と「身近なものと関わり感性が育つ」は心理社会的な観点に基づく発達観といえる。

今回の改定のこの方向性に直接的な影響を与えた社会保障審議会児童部会保育専門委員会が行った議論について検討する。同委員会(2016)が「議論のまとめ」を示している。「乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実」を意図した理由として次のように記されている。

○ 乳児から2歳児までは、他者との関わりを初めて持ち、その中で自我が形成されるなど、子どもの心身の発達にとって極めて重要な時期である。この時期の保育の在り方は、その後の成長や社会性の獲得等にも大きな影響を与えるものと考えられている。

○ また、近年、国際的にも、自尊心や自己制御、忍耐力といった社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力を乳幼児期に身に付けることが、大人になってからの生活に大きな差を生じさせるといった研究成果などから、乳幼児期、とりわけ3歳未満児の保育の重要性への認識が高まっている。

(社会保障審議会児童部会保育専門委員会[2016]2, 下線は筆者による。)

「その後の成長や社会性の獲得」のために「他者との関わり」の重要性が再認識されている。さらに「大人になってからの生活」で大きな影響を与える「社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力」の育成を強調している。このように、心理社会的な観点に基づく発達観に重きが置かれていたといえる。

2. 生物学的な観点を重視する発達観

一方、生物学的な存在としての「ヒト」と、社会的な存在としての「人」とを分けながら、乳幼児の発達を捉える立場は多い。例えば、感覚統合法で知られるエアーズ(1980, 佐藤訳(1985))は、前庭感覚・固有感覚、触覚、視覚、聴覚の各感覚機能の作用の仕方を段階的に示し、全身を使った心地よい運動遊びの大切さを指摘している。生物学的な発達が、後発する心理社会的な発達を底支えるという考え方である。

主に肢体不自由児の療育に関する実践を基礎にしながら高松(1990)は次のように説明している。

今、仮に赤ちゃんが成長し、社会人となっていく過程を一定のプログラムとして考えれば、そのプログラムは次の三つの要素から成り立っていると考えられます。

一つ目の要素は、成熟のプログラム(別な言い方をすれば、遺伝子が規定するプログラム)です。私た

ちはこのプログラムに従って乳児から幼児となり、やがて思春期を経て成人となっていきます。

二つ目の要素は、ヒトという生物になるために必要な学習プログラムで、三つ目の要素は、身辺自立から始まる社会人となるための学習プログラムです。この両者は必ずしもきれいに分けることはできないものですが、このように分けて考えていただきたいのです。

この三つ目のプログラムは、まさに三歳児以上の幼児教育から大学教育にいたる、いわゆる教育の過程で、私はこれを「文化社会的学習プログラム」と名付けています。

(高松 [1990] 133, 下線は筆者による。)

遺伝的に予定されている①成熟プログラムと、感覚や運動の学習である②生物学的学習プログラム、学校教育で中心的に行われるであろう③社会的学習プログラムの3つの要素に分けた発達観を展開している。要素②はエアーズの感覚統合法と重なる。要素③は前述した心理社会的な立場に重なる。高松(1990)はその3要素すべてを重要と捉えて、その偏りに対して警鐘を鳴らしている。典型的な記述を引用する。

彼らの行動を表面的に捉えてはならぬ。皮相的な保育(社会文化的学习)で遅れや歪みを矯正しようと試みる前に、彼らの感覚と運動の学習のことを考えて下さい。冷水まさつや乾布まさつ、温冷浴に空気浴、薄着と裸と裸足、それに抱っこにオンブにデングリ返し、お相撲ごっこに押しくらまんじゅう、ブランコやスベリ台、ジャングルジムなど、これらの感覚・運動学習は迂遠に見えてその実、彼らの遅れの本質に迫る学習であると、私は考えています。

(高松 [1990] 140, 下線は筆者による。)

発達の障害の有無にかかわらず、発達の初期段階(乳幼児期)の子どもに対しては、要素③への強い傾斜よりも、「迂遠に見え」るかもしれないが、要素②が重要であると指摘している。また、奨励している「感覚・運動学習」の例は、前庭感覚機能・固有感覚機能・触感覚機能に意図的に働きかけることを奨励するエアーズの指摘と一致している。

Ⅱ. 目的

そこで本稿では、改定『保育所保育指針』の解説(厚生労働省, 2018)に高松(1990)やエアーズ(1980)が重要視している生物学的学習プログラムを象徴する「感覚」という語句の使われ方、とくにその多義性を考察することを通して、同解説、すなわち保育所保育の指針を支えている発達観の特徴を明らかにすることを目的とする。

Ⅲ. 方法

1. 分析対象とした『保育所保育指針解説』から抽出した文

厚生労働省(2018)の『保育所保育指針解説』の全文の中から「感覚」という語句が使用されているすべての文(64件のセンテンス)を対象にした。抽出した文の平均文字数は77.9文字で、標準偏差は26.9文字であった。

2. 分析の手続き

(1)「感覚」という語句の意味の書き出し

「感覚」という語句の辞書上の意味について、「精選日国(電子版)」「大辞泉(電子版)」「明鏡(電子版)」に記された情報をもとに筆者が整理した。整理の結果、抽出した各文の分類の観点は以下の5つとした。高松(1990)の指摘に従えば、①～③は生物学的学習プログラムに、④・⑤は社会的学習プログラムの概念に一致する。

- ①内外の感覚刺激を受容する器官
- ②生物学的な感覚機能または感覚統合
- ③感覚刺激によって生じる意識経験
- ④感受性（物事を鋭敏に感じとる精神の働き）
- ⑤熟慮によらない直感的な感じ方

（2）抽出した各文での「感覚」という語句の意味の特定

抽出した全64件の文の中で用いられている「感覚」という語句の文脈上の意味として、上記①～⑤の観点で筆者が分類した。なお、複数の観点に合致する場合は、そのすべてを割り当てた。

（3）筆者以外の他者による再分類

教員養成学部にて在籍して障害児教育学を専攻する4年次生3人に筆者による割り当てに違和感があるかどうかを確認するように依頼した。その依頼から約1か月後に、（2）の割り当てに違和感があったかを聞きとり、当該学生と話し合っ、修正を行い、正式な分類結果とした。

IV. 結果と考察

1. 全体的な傾向

表1 「感覚」という語句の使われ方を分類した結果

| 整理番号・元 | 整理番号 | ページ番号 | 文脈上の意味 | | | | | 使用のされ方 | 引用文 | 文字数 |
|--------|------|-------|---------------------|-----------------------|----------------------|---------------------------|---------------------|--------|--|-----|
| | | | ① 内外の感覚刺激を受容する器官 | ② 生物学的な感覚機能または感覚統合 | ③ 感覚刺激によって生じる意識経験 | ④ 感受性（物事を鋭敏に感じとる精神の働き） | ⑤ 熟慮によらない直感的な感じ方 | | | |
| 19 | 1 | 119 | 1 | | | | | 感覚 | 乳児期は、身近な人やものとの直接的な関わりを通して、その意味や性質、特徴などを感覚によって捉えている時期である。 | 56 |
| 21 | 2 | 120 | 1 | | | | | 体の諸感覚 | こうして体の諸感覚を十分に働かせながら遊び込む経験を重ねて、子どもの認識する世界は豊かさを増していく。 | 51 |
| 22 | 3 | 120 | 1 | | | | | 諸感覚 | このように、諸感覚を使いながらものを介して身近な人と心を通い合わせる経験が、更に身の回りの様々な環境への興味や好奇心を旺盛にかきたてる上での支えにもなる。 | 77 |
| 24 | 4 | 121 | 1 | | | | | 感覚 | 子どもは、例えば雨の音、風に揺れる木々の音や動き、天井に映る光と影、虫の声など、自然現象をはじめとして感覚を刺激する有形無形の様々なものや事象に囲まれて生活している。 | 83 |
| 44 | 5 | 173 | 1 | | | | | 諸感覚 | このように自分の身体を通した経験を豊かに重ねていくことが、諸感覚の発達を促し、子どもの世界を広げていくことになる。 | 57 |
| 61 | 6 | 275 | 1 | | | | | 諸感覚 | 子どもは、生活の中で様々なものから刺激を受け、敏感に反応し、諸感覚を働かせてそのものを素朴に受け止め、気付いて楽しんだり、その中にある面白さや不思議さなどを感じて楽しんだりする。 | 89 |
| 23 | 7 | 121 | 1 | 1 | | | | 体の諸感覚 | このように、子どもの主体性を尊重した生活や遊びは、子どもが身近なものに興味をもち、自らで行動しようとする意欲を育て、同時に、人との関わりの力や体の諸感覚をも育てているということに留意する。 | 94 |

| | | | | | | | | | |
|----|----|-----|---|---|---|---|--------|--|-----|
| 36 | 8 | 153 | 1 | 1 | | | 様々な感覚 | 周囲の様々な環境に興味や関心を広げ、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなど様々な感覚を働かせながら対象に関わる。 | 55 |
| 43 | 9 | 173 | 1 | 1 | | | 様々な感覚 | 乳児期よりも更に多様なものに出会い、触れ合うことで、形や色、音、感触、香りなど、それぞれがもつ性質や特徴を様々な感覚によって捉えるようになる。 | 71 |
| 46 | 10 | 175 | 1 | 1 | | | 諸感覚 | こうした感触を十分に味わい、諸感覚を働かせていくことが、子どもの感性を育む。 | 38 |
| 1 | 11 | 26 | 1 | 1 | | | 身体の諸感覚 | こうした環境との相互作用の中で、子どもは身体の諸感覚を通して多様な刺激を受け止める。 | 42 |
| 25 | 12 | 121 | 1 | 1 | | | 感覚の働き | 保育所の生活や遊びを繰り返しながら、様々につくり出されたり生み出されたりする音や動き、ものの形、色、手触りなどは、子どもの気付きを促し、感覚の働きを豊かにする環境として重要である。 | 90 |
| 48 | 13 | 177 | 1 | 1 | | | 感覚 | 聴覚や嗅覚など、外界を知覚するための感覚は、誕生の時点である程度発達した状態にあるが、その後、実際に外界と関わる経験を通して、それらはより発達していく。 | 76 |
| 2 | 14 | 40 | | 1 | | | 身体感覚 | 特に、乳児期の子どもが十分にスキンシップを受けることは、心の安定につながるだけでなく、子どもの身体感覚を育てる。 | 56 |
| 3 | 15 | 75 | | 1 | | | 諸感覚 | 卒園を迎える年度の後半には、こうした積み重ねを通して、充実感をもって自分のやりたいことに向かって、繰り返し挑戦したり諸感覚を働かせ体を思い切り使って活動したりするなど、心と体を十分に働かせ、遊びや生活に見通しをもって自立的に行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出す姿が見られるようになる。 | 144 |
| 10 | 16 | 103 | | 1 | | | 身体感覚 | この時期の子どもは最初、自身と外界の区別についての意識が混沌としている状態の中で、身近な環境との関わりを通して身体感覚を得ていく。 | 65 |
| 12 | 17 | 103 | | 1 | | | 身体の諸感覚 | 身体の諸感覚が育つ中で、子どもが自分の働きかけを通して心地よい環境を味わう経験を重ねることが重要である。 | 52 |
| 28 | 18 | 124 | | 1 | | | 感覚や動き | そのため、この時期の子どもにふさわしい玩具を選ぶ際には、その音の大きさや質、形や手触り、色合い、大きさや重さ、持ちやすさなど、子どもの感覚や動きに照らして吟味する。 | 82 |
| 34 | 19 | 153 | | 1 | | | 様々な感覚 | 子どもが自ら感じ取る世界を豊かなものとしていくためには、直接的な経験を通して、様々な感覚を十分に働かせることが必要である。 | 61 |
| 51 | 20 | 183 | | 1 | | | 様々な感覚 | こうした環境に触発されるようにして、子どもは様々な感覚を働かせながら周囲のものと関わり、そこで発見したことや心を動かされるような出来事を保育士等に告げ、共感や励ましを得て、更に好奇心や感性を豊かにしていく。 | 103 |
| 9 | 21 | 101 | | 1 | | | 感覚 | 乳児期は、心身両面において、短期間に著しい発育・発達が見られる時期である。生後早い時期から、子どもは周囲の人やものをじっと見つめたり、声や音がする方に顔を向けたりするなど、感覚を通して外界を認知し始める。 | 102 |
| 49 | 22 | 177 | | 1 | 1 | | 身体感覚 | このように、日常生活で身体感覚を伴う様々な体験を積み重ねる中で、子どもはその性質や不思議さ、面白さに気付き、更に興味を膨らませる。 | 67 |
| 35 | 23 | 153 | | 1 | 1 | 1 | 感覚や感性 | 子どもの豊かな感覚や感性は、子どもの行動や手の届く範囲などを踏まえて安全や活動のしやすさに配慮された環境の下、安心できる保育士等の存在を頼りどころにして、活発な探索活動が促される中で培われていく。 | 98 |
| 37 | 24 | 154 | | 1 | 1 | 1 | 感覚や感性 | 保育士等は、子どもの活発な探索活動が豊かな感覚や感性を促していくことに留意し、安全で活動しやすい環境を整えるとともに、自らも感受性を豊かにし、子どもの思いを受け止めて丁寧に関与することが求められる。 | 98 |
| 29 | 25 | 135 | | 1 | | 1 | 感覚の育ち | このような応答的な関わりを基本にしながら、子どもたちが慣れ親しんでいる遊具などを通して一緒に遊び、子どもの発達過程に必要な人との関わりやものを通じた感覚の育ちを意識して環境を構成する。 | 92 |
| 14 | 26 | 105 | | | 1 | | 体が動く感覚 | それは、自分の体が動く感覚と求めたものが手に入る経験とが、同時に起こるということである。 | 44 |

| | | | | | | | | | |
|----|----|-----|--|--|---|---|----------|---|-----|
| 15 | 27 | 107 | | | 1 | | 感覚 | おむつが濡れているのを感じている時に、「気持ち悪いね」という気持ちの伴った言葉がけとともに、おむつを交換してもらい、その結果、濡れていた時とは異なる乾いてさらさらした感覚を「さっぱりしたね」というやはり気持ちの伴った言葉とともに経験する。 | 118 |
| 16 | 28 | 107 | | | 1 | | 心地よさの感覚 | この経験が毎日何度も繰り返されることで、清潔に対する心地よさの感覚が育っていく。衣服の着脱や食事時に手や顔を拭いてもらうといった経験も、同様である。 | 74 |
| 17 | 29 | 115 | | | 1 | | 感覚や感情 | このように、身近な大人と感覚や感情を共有する経験を重ねることは、言葉の理解や子ども自身の言葉を発したいという意欲を育んでいく。 | 63 |
| 30 | 30 | 136 | | | 1 | | 様々な感覚 | 体全体を使う喜びを伴った遊びは、運動に関わる諸機能を発達させるとともに、子どもが自分の体で様々な感覚を体験することをもたらす。 | 63 |
| 31 | 31 | 137 | | | 1 | | 感覚と行為、言葉 | おいしさや食べることの心地よさ、満足感などを表現する保育士等の気持ちや雰囲気を感じながら、子どもの感覚と行為、言葉が一致していく。 | 65 |
| 32 | 32 | 137 | | | 1 | | 感覚 | 食事を取る時に、「初めての味だけど、さっぱりしていて食べやすいよ」「トロトロに煮込んであるからおいしいよ」といった快の気持ちを伴う言葉を保育士等からかけられることによって、子どもにもそうした感覚が育っていく。 | 104 |
| 33 | 33 | 138 | | | 1 | | 心地よさの感覚 | 例えば、トイレから出てきて石けんで手を洗う時や、外遊びの後に服が汗や泥で汚れている時などに、保育士等が「きれいにしようね」「さっぱりしたね」と子どもに分かりやすい言葉で意味を添えながら根気よく関わり続けていくことで、子どもは行為に伴う心地よさの感覚と意味を結び付けて、その必要性を理解する。 | 145 |
| 40 | 34 | 157 | | | 1 | | 様々な感覚 | 手触り、重さ、大きさ、におい、動き、鳴き声などの様々な感覚を直接的に体験し、命をもつものの存在を実感する。 | 53 |
| 45 | 35 | 174 | | | 1 | | 感覚とイメージ | 子どもが環境と関わり様々な感覚を味わう際に、保育士等もその感覚と一緒に楽しんだり、「真っ白で、雪みたいだね」などと感覚とイメージを結ぶ言葉を添えたり、「こっちは砂は、サラサラだね」と気付きを促したりすることで、子どものイメージは更に膨らみ、感性も豊かになっていく。 | 132 |
| 50 | 36 | 177 | | | 1 | | 感覚 | 保育士等は、身近な環境に関わって、直接聞いたり、見たり、触れたり、味わったり、嗅いだりする子どもの感覚に心を傾け、子どもの感動や発見に寄り添いながら、子どもの感性が豊かに育つよう働きかけていく。 | 97 |
| 52 | 37 | 230 | | | 1 | 1 | 新たな感覚 | 例えば、子どもは、他の子どもが作った物やしていることに憧れて、自分もそのような物を作ろうとしたり、知らず知らずのうちに他の子どもの動きを真似したりする中で、周囲のものや遊具などとの多様な関わり方を学んだり、新たな感覚を体感したりして、自分の中に取り込み、自ら行動するようになる。 | 139 |
| 55 | 38 | 254 | | | 1 | 1 | 感覚 | このような感覚が、小学校における数量や文字の学習にとって生きた基盤となるものである。 | 42 |
| 38 | 39 | 156 | | | | 1 | 感覚 | このように自分が日々過ごす環境を、自分の活動と結び付けて捉える感覚が育っていく中で、子どもは主体的に自らの生活をつくり出していく。 | 65 |
| 4 | 40 | 90 | | | | 1 | 関心・感覚 | 子どもの数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚は、領域「環境」などで示されているように、日常生活の中で、数量や文字などに接しながらその役割に気付き、親しむ体験を通じて育まれていく。 | 91 |
| 5 | 41 | 90 | | | | 1 | 関心・感覚 | なお、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚は、領域「環境」のみで育まれるのではなく、第2章に示すねらい及び内容に基づく保育活動全体を通して育まれることに留意する必要がある。 | 88 |
| 6 | 42 | 91 | | | | 1 | 感覚 | 卒園を迎える年度の後半になると、それまでの体験を基に、自分たちの遊びや生活の中で必要感をもって、多い少ないを比べるために物を数えたり、長さや広さなどの量を比べたり、様々な形を組み合わせで遊んだりすることなどを通して、数量や図形への興味や関心を深め、感覚が磨かれていく。 | 134 |
| 7 | 43 | 91 | | | | 1 | 感覚 | また、遊びや生活の中で関係の深い標識や文字などに関心をもちながらその役割に気付いたり使ってみたりすることで、興味や関心を深め、感覚が磨かれていく。 | 73 |

| | | | | | | | | | | |
|----|----|-----|--|--|--|---|---|-------------|---|-----|
| 8 | 44 | 92 | | | | 1 | | 関心や感覚 | こうした幼児期の数量や図形、標識や文字などへの関心や感覚は、小学校の学習に関心をもって取り組み、実感を伴った理解につながることも、学んだことを日常生活の中で活用する態度にもなるものである。 | 95 |
| 26 | 45 | 122 | | | | 1 | | 感覚 | また、別の時には、同じ絵本でも、一緒に色や形などを楽しみながらその感覚の世界に浸り、自らの感覚を研ぎ澄ましていくこともある。 | 62 |
| 41 | 46 | 166 | | | | 1 | | 言葉の感覚 | 絵本や紙芝居は、子どもに新たな言葉との出会いをつくり、言葉の感覚や語彙を豊かにするとともに、子どものイメージの世界を広げる。 | 62 |
| 42 | 47 | 166 | | | | 1 | | 言葉に対する感覚 | ごっこ遊びの場面で、保育士等が挨拶を交わしたり、返事をしたり、擬音語や擬態語を口にしたたり、場面や役に合わせた言葉を話したりすることは、子どもの言葉に対する感覚や語彙を豊かにする | 88 |
| 54 | 48 | 254 | | | | 1 | | 数量や文字に関わる感覚 | 幼児期に大切にしたいことは、習熟の指導に努めるのではなく、子どもが興味や関心を十分に広げ、数量や文字に関わる感覚を豊かにできるようにすることである。 | 74 |
| 56 | 49 | 256 | | | | 1 | | 言葉に対する感覚 | このような経験は、言葉に対する感覚を養い、状況に応じた適切な言葉の表現を使うことができるようになる上でも重要である。 | 58 |
| 57 | 50 | 263 | | | | 1 | | 言葉の感覚 | このように、幼児期においては、保育所の生活を通して言葉の様々な楽しさや美しさに気付くことが、言葉の感覚を豊かにしていくことにつながるのである。 | 71 |
| 58 | 51 | 263 | | | | 1 | | 言葉の感覚 | しかし、言葉ではなかなかうまく表現できなくても、具体的なイメージとして心の中に蓄積されていくことは、言葉の感覚を豊かにする上で大切である。 | 69 |
| 60 | 52 | 264 | | | | 1 | | 言葉の感覚 | このような感覚に基づく表現を通して子どもがそれぞれの言葉にもイメージが豊かになり、言葉の感覚は磨かれていく。 | 55 |
| 62 | 53 | 276 | | | | 1 | | 感覚 | そして、このような体験を繰り返す中で、気付いたり感じたりする感覚が磨かれ、豊かな感性が養われていく。 | 50 |
| 63 | 54 | 302 | | | | 1 | | 感覚 | そのためには、保育士等自身が地域における一人の生活者としての視点や感覚をもちながら毎日の生活を営む中で、家庭や地域社会と日常的に十分な連携をとり、一人一人の子どもの生活全体について互いに理解を深めることが不可欠となる。 | 109 |
| 64 | 55 | 324 | | | | 1 | | 感覚 | 例えば、野菜などの栽培や収穫を通して、食べ物が土や雨、太陽の光などによって育つことに気付いていくことや、毎日運ばれてくる野菜や果物、肉や魚などの食材を日々の生活の中で目にしたり、触れたりする機会などを通して、子どもは自らの感覚で食材や食の環境を意識するようになる | 131 |
| 13 | 56 | 104 | | | | 1 | 1 | 生活のリズムの感覚 | 日常生活におけるこの心地よい繰り返しが、生活のリズムの感覚を培うのである。 | 37 |
| 18 | 57 | 118 | | | | 1 | 1 | 感覚 | このように絵本と言葉、そして実際の体験を重ね合わせる保育士等の援助は、子どもの言葉の獲得を促すとともに、子ども自身が言葉を獲得していくことを喜びとする感覚を育んでいく。 | 84 |
| 39 | 58 | 156 | | | | 1 | 1 | 感覚 | 保育士等は、居心地のよさや「ここは自分の居場所である」という感覚を子どもがもつことができるよう、保育の環境を整えていく必要がある。 | 68 |
| 47 | 59 | 175 | | | | 1 | 1 | 感覚や感性 | 様々な状態の様々な素材に自らの体で直接触れ、そのものの感触などを十分に味わい、楽しむ経験を通して、子どもは自らの感覚や感性を豊かにしていくのである。 | 74 |
| 53 | 60 | 251 | | | | 1 | 1 | 身体的感覚 | つまり、子どもが身体的感覚を呼び覚まされ、心がわき立つような思いのできる出会いが大切である。 | 46 |
| 11 | 61 | 103 | | | | | 1 | 感覚的 | 例えば、機嫌よく目覚めている時、自らの手をかざして眺めたりして手を発見する。その手で周囲を探索して、人やものの感触の違いを感覚的に理解する。 | 70 |
| 20 | 62 | 119 | | | | | 1 | 感覚的 | また、子どもは何かをじっと見つめたり、手にしたものを何度もあれこれと試してみたりする中で、その変化や反応の様子から、自分と環境の関係にも感覚的に気付いていく。 | 80 |
| 27 | 63 | 123 | | | | | 1 | 感覚的 | このような遊びの中で行われる保育士等の言葉がけは、感覚的な理解と言葉による理解の橋渡しをするものとなる。 | 52 |

| | | | | | | | | | | |
|----|-----|-------|-------|-------|-------|-------|---|-----|---|------|
| 59 | 64 | 263 | | | | | 1 | 感覚的 | 特に、子どもは、初めて出会い、体験したことを言葉でうまく表現できず、それは感覚的なイメージとして蓄積されることが多い。 | 59 |
| | 該当数 | 13 | 19 | 16 | 27 | 9 | | — | 平均＝ | 77.9 |
| | 構成比 | 20.3% | 29.7% | 25.0% | 42.2% | 14.1% | | — | 標準偏差＝ | 26.9 |

表2 『保育所保育指針解説』の「感覚」という語句の文脈上の意味

| | 件数 | 構成比 |
|-----------------------|----|-------|
| 生物学的学習プログラム | 48 | 75.0% |
| ①内外の感覚刺激を受容する器官 | 13 | 20.3% |
| ②生物学的な感覚機能または感覚統合 | 19 | 29.7% |
| ③感覚刺激によって生じる意識経験 | 16 | 25.0% |
| 社会的学習プログラム | 36 | 56.3% |
| ④感受性（物事を鋭敏に感じとる精神の働き） | 27 | 42.2% |
| ⑤熟慮によらない直感的な感じ方 | 9 | 14.1% |

抽出した全64件の文中の「感覚」という語句の使われ方を分類した結果を表1に、分類の集計を表2に示す。なお、複数の観点に合致した文があったため、件数も構成比も各64件・100%を超えている。

「感覚」という語句の使われ方については、生物学的学習プログラムとしての意味が48件（75.0%）で、社会的学習プログラムが36件（56.3%）であった。大きく分けての2つの意味が明らかに混在しており、文脈によって「感覚」という語句の意味が異なっていた。また、観点別では「④感受性（27件・42.2%）」が最も多く、同解説の全体的な基調を表していると考えられる。

2. 生物学的学習プログラムと社会的学習プログラムに関する記述

生物学的学習プログラムと社会的学習プログラムの2つの観点に分類された各文の傾向について、AIテキストマイニング（<https://textmining.userlocal.jp/>）のワードクラウド（スコア順）を用いて検討する。

（1）生物学的学習プログラム

生物学的学習プログラムに分類された各文のワードクラウドを図1に示す。「働かせる」「つくり出す」「心地よい」などが重要語句のようである。それらが使われている代表的な文を以下に引用する。

- ・保育所の生活や遊びを繰り広げる中で、様々につくり出されたり生み出されたりする音や動き、ものの形、色、手触りなどは、子どもの気付きを促し、感覚の働きを豊かにする環境として重要である。（p.121）
- ・周囲の様々な環境に興味や関心を広げ、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなど様々な感覚を働かせながら対象に関わる。（p.153）
- ・身体の諸感覚が育つ中で、子どもが自分の働きかけを通して心地よい環境を味わう経験を重ねることが重要である。（p.103）

（下線は筆者による。）

分りやすい 添える よい
 興味 膨らむ 自ら 受け止める 性質 広げる 悪い
 面白い 快い 持ちやすい 豊か 乳児 育む 捉える
 ふさわしい 直接的 十分 音 多様 重ねる
 周囲 味わう 身体 心地よい
 気持ち 手触り 遊び 心 嗅ぐ
 楽しむ 感性 様々 活動 著しい
 動き 育つ 環境 促す 身近 外界 子ども 生活 しやすい
 使う 言葉 保育士 関わり 発達 経験 大きい
 育てる いく 面白い 時期 早い 食べる 関わる 行動 感じる

– 31 –

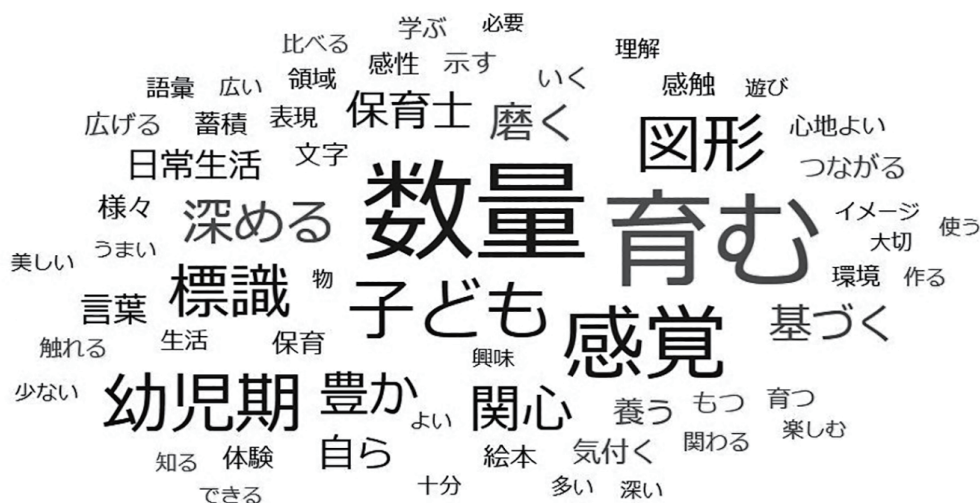


図2 社会的学習プログラムに関する記述のワードクラウド

V. まとめと今後の課題

「感覚」という語句はそもそも多義的である。『保育所保育指針解説』でも「感覚」という語句は文脈によって異なる意味として使用されていた。また、社会的学習プログラムという立場からの記述が多いことに注目したい。今回の改定では、3歳児未満の保育に関する記述を拡充したとされるが、生物学的学習プログラムという観点がやや弱いことが今後検討すべき事項と考えられる。3歳児未満の保育に加えて、多様な保育ニーズをもつ子どもへの対応の質的な向上も求められている。今後、社会的な存在としての「人」、つまり社会的学習プログラムという観点と、生物としての「ヒト」、つまり生物学的学習プログラムの両面から、子どもの発達をより多角的に評価した上での保育が望まれる。

文献

- 1) Ayres, A.J (1980) Sensory Integration and the Child. Western Psychological Services. 佐藤剛訳 (1985) 子どもの発達と感覚統合. 協同医書出版.
- 2) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説. 厚生労働省, 2018年6月22日. <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf> (2021年6月4日最終閲覧).
- 3) 社会保障審議会児童部会保育専門委員会 (2016) 保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ. 厚生労働省, 2016年12月21日. https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/1_9.pdf (2021年6月4日最終閲覧).
- 4) 高松鶴吉 (1990) 療育とはなにか. ぶどう社.